

学生（高校生・大学生）の統計意識

分析 1 — 地域別分析 —

永 井 博（熊本商科大学）

坂 田 幸 繁（九州大学）

はじめに

われわれは、ここ数年来識者の間で問題になっている統計環境の悪化現象を解明するために、被調査者である国民の成人層を対象とする統計環境の実態調査を行なった。その成果は、すでに2つの報告書（『統計環境の実態』，九大統計学研究室，1979年，『研究所報No.4』，法政大学日本統計研究所，1979年）にまとめられている。本稿は，いわばその補完ともいうべきもので，学生層（高校生および大学生）の統計意識を手がかりとして，いま一度統計環境の実態に接近することをめざしている。

注）以下，分析の基礎となっているそれぞれの調査を，「成人調査」，「高校生調査」，「大学生調査」とよび，それらの対象サンプルを〔成人層〕，〔高校生〕，〔大学生〕（後二者を〔学生層〕）と記す。各調査の調査方法の詳細については，本所報および前掲書を参照されたい。

分析にさいしては，主に次のような調査結果の比較を行なっている。すなわち，

- ① 「高校生調査」にもとづく〔高校生〕地点比較
- ② 「高校生調査」と「成人調査」にもとづく〔高校生〕と〔成人層〕との比較
- ③ 「大学生調査」と「成人調査」にもとづく〔大学生〕と〔大卒成人層〕との比較，である。

都市化と統計環境の悪化との関係は，「成人調査」を設計するさいの主要な問題意識であった。比較①は，その延長線上にある。すなわち，「都市部」と「農村部」という生活環境の相異が，〔高校生〕の統計意識においてどのような形であらわれているかをみることにねらいがある。ただし，「高校生調査」の調査対象地点は，「町田」（東京都町田市所在高校），「福岡」（福岡県福岡市所在高校），「矢部」（熊本県矢部町所在高校），「知覧」（鹿児島県知覧町所在高校），および「富江」（長崎県富江町所在高校）の5地点である。そのなかで，「都市部」とは，「町田」と「福岡」の2地点をさし，「農村部」とは，「矢部」，「知覧」，および「富江」の3地点を意味する。

比較②と③では，〔成人層〕との関連で〔学生層〕の統計意識を検討する。そのさい，調査方法の相異という比較上の制約を考慮して，何らかの傾向が各調査を通じて読みとれる場合だ

けそのことにふれることにしたい。

I 若干の予備的考察 — 「成人調査」の分析から

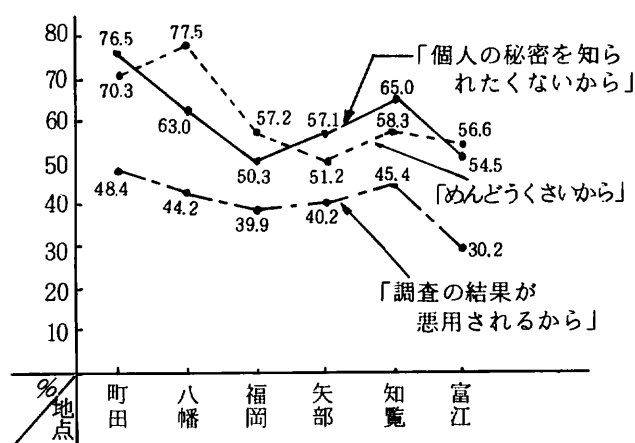
国の統計調査にたいする被調査者の協力、非協力意識は、実査がそれを通して行なわれる社会的、風土的、歴史的地盤と不可分の関係にある。われわれは、「成人調査」の結果から、統計環境あるいは統計調査環境の悪化といわれる状況を次のように把握した。

「農村部」（矢部、知覧、富江の3地点）においては、地縁・血縁関係などを基礎とする地域共同体的人間関係が、統計調査の有効な楯杆として機能している。また、そのような事情を反映してか、プライバシー意識と統計調査との対立関係も、「都市部」ほどには顕在化していない。

他方、「都市部」（町田、福岡、八幡の3地点）では、「プライバシー問題」、「顔見しり調査員問題」にあらわれているように、「農村部」において実査を成立せしめた諸条件は、広範に解消もしくは崩壊しつつある。

図1をみられたい。これは、「個人の秘密をしられたくないから」、「調査の結果が悪用されるおそれがあるから」、および「めんどくさいから」という要因は、それぞれ「調査拒否の理由としてどの程度大きいか」という質問にたいして、「大きな理由となっている」と「少

図1 調査拒否の理由（成人層）



「研究所報」No.4.P35 参照

しは理由になっている」と答えたものの地点別合計をグラフ化したものである。この表は、その比率が高い地点ほど、調査拒否の要因がより広範な住民意識のうねりにのぼっていることを示

している。

若干の攪乱を含みながらも、その比率は、離島（富江）→農村部（矢部・知覧）→都市部（福岡・八幡）→大都市団地（町田）と上昇傾向にある。このことは、都市化と統計環境悪化との間の因果関係をものがたっている。これが、「成人調査」の分析からえられた第1の特徴である。

ここにもうひとつの表がある。この表（表I）は、「より正しい統計をつくるためには個人

表I 正しい統計と個人の秘密（成人層・年令別）

区部		正しい統計	プライバシー	その他D・K	計	
都市部	20代	39.3	52.4	8.3	100.0	145
	30代	41.9	52.1	6.0	100.0	215
	40代	43.4	50.0	6.6	100.0	212
	50代	39.3	44.9	15.7	100.0	89
	60代	43.3	45.0	11.7	100.0	60
	計	41.6	50.1	8.3	100.0	721
農村部	20代	43.1	52.0	4.9	100.0	123
	30代	48.8	39.7	11.6	100.0	121
	40代	40.5	44.4	15.1	100.0	205
	50代	44.8	41.7	13.5	100.0	163
	60代	42.2	34.3	23.5	100.0	102
	計	43.6	42.9	13.6	100.0	714

大屋・坂田，「統計環境の現状」，九州経済統計月報Vol.34,P30参照

の秘密にふれることがあってもしかたがない」という意見 — 以下，「統計優先」志向と略す — と，「正しい統計をつくるためであっても個人の秘密にはふれるべきではない」という意見 — 以下，「プライバシー優先」志向と略す — に関して，回答者に二者択一的選択をもとめた質問についての年令別集計表である。

「都市部」，「農村部」とも，若年層ほど，「正しい統計」より「個人の秘密」を優先させる「プライバシー優先」型回答の比率が高くなる傾向にある。とりわけ，「農村部」の20代若年層が都市型回答パターン — 「プライバシー優先」が「統計優先」を上まわる — を示していることは留意されねばならない。統計環境の悪化は，都市化という方向にくわえて，新旧世代の意識変化を通して進行する社会的現象であるといえる。

さて，本稿の分析対象である〔高校生〕および〔大学生〕は，「成人調査」における20代若

年層よりもさらに若い新世代である。かれらにおいて、その統計心象ないしは統計意識はどのような様相を呈しているであろうか。それが本稿の課題である。

Ⅱ プライバシー優先傾向と統計調査

個人の秘密にふれられたくないから、あるいは、調査結果が悪用されるから回答を拒否するといったような事態は、被調査者におけるプライバシー意識のたかまりを物語っている。本節では、プライバシー意識との関連で、〔学生層〕の統計意識を検討する。まず、「調査拒否の理由」についてたずねた質問からみていこう。

表Ⅱ－１，２は、その質問にたいする集計結果であるが、これら２表から、「個人の秘密をしられたくないから」と「悪用されるおそれがあるから」という拒否要因を、〔高校生〕がどの程度強く意識しているかをしることができる。

・表Ⅱ－１ 拒否理由：個人の秘密を知られたくないから

		大きな理由となっている	少しは理由になっている	あまり理由になっていない	全然理由になっていない	その他	D・K	計	
〔高校生〕	町 田	18.7	46.2	23.6	10.0	1.5	0.0	100.0	331
	福 岡	22.8	44.7	24.5	6.9	0.9	0.3	100.0	1357
	農村部	20.0	53.1	21.0	5.4	0.1	0.3	100.0	794
	計	21.4	47.6	23.3	6.8	0.7	0.2	100.0	2482
〔成人層〕計		21.5	38.0	22.7	8.6	0.6	8.6	100.0	1435

表Ⅱ－２ 拒否理由：調査の結果が悪用されるおそれがあるから

		大きな理由となっている	少しは理由になっている	あまり理由になっていない	全然理由になっていない	その他	D・K	計	
〔高校生〕	町 田	13.3	45.6	29.6	10.9	0.6	0.0	100.0	331
	福 岡	13.6	39.4	32.7	13.0	0.4	0.7	100.0	1357
	農村部	16.1	44.5	28.7	10.2	0.0	0.5	100.0	794
	計	14.4	41.9	31.0	11.8	0.3	0.6	100.0	2482
〔成人層〕計		10.6	30.3	27.6	18.9	1.1	11.5	100.0	1435

それをみると、調査拒否の「理由となっている」（「大きな理由となっている」と「少しは理由になっている」）と答えたものは、「個人の秘密をしられたくないから」では、「町田」65%、「福岡」67%、「農村部」3地点計73%、「悪用されるおそれがあるから」では、「町田」59%、「福岡」53%、「農村部」61%と、「農村部」が「都市部」を上まわっている。〔都市部高校生〕より〔農村部高校生〕において、これら2つの要因が調査拒否の理由として広く意識されているようである。

つぎに、〔成人層〕計と〔高校生〕計を比較すると、その比率は、「個人の秘密」では〔成人層〕6割、〔高校生〕7割弱であり、「悪用のおそれ」では、〔成人層〕4割、〔高校生〕5割台と、〔高校生〕が〔成人層〕を1割以上も上まわっている。

「悪用されるおそれがあるから」という被調査者の意識を、具体的次元でたずねた質問がある。「調査で答えたことは、税金の参考資料に利用されていると思うか」という質問と、「身元調査に利用されていると思うか」という質問である。

その集計表をみると（表Ⅱ－3、4参照）、「利用されている」および「これによると利用されているかもしれない」という悪用への危惧感は、〔成人層〕より〔高校生〕の方が強い。

表Ⅱ－3 税金への悪用

		利用されている	ことによると利用	利用されていない	その他	D・K	計	
〔高校生〕	町田	11.2	59.2	26.6	3.0	0.0	100.0	331
	福岡	10.4	57.4	28.3	0.9	3.0	100.0	1357
	農村部	13.9	56.7	26.2	0.5	2.8	100.0	794
	計	11.6	57.4	27.4	1.0	2.5	100.0	2482
〔成人層〕計		10.7	32.5	42.6	2.2	11.9	100.0	1435

表Ⅱ－4 身元調査への悪用

		利用されている	ことによると利用	利用されていない	その他	D・K	計	
〔高校生〕	町田	11.2	55.6	30.5	2.7	0.0	100.0	331
	福岡	10.3	50.3	37.7	0.1	1.5	100.0	1357
	農村部	12.7	53.1	32.5	0.3	1.4	100.0	794
	計	11.2	51.9	35.1	0.5	1.2	100.0	2482
〔成人層〕計		15.7	28.2	40.1	2.2	13.8	100.0	1435

また地点別には、〔農村部高校生〕と〔都市部高校生〕との間に大きな差はないといえる。

表Ⅱ－5からは、調査員や統計職員の「守秘義務」遵守に関する〔高校生〕の心象をうかがうことができる。「（調査員や統計職員の）なかには秘密を守っていない人もいる」という回答に注目したい。

まず〔高校生〕と〔成人層〕を比較すると、その比率は、〔高校生〕計 74%, 〔成人層〕計 48%である。〔高校生〕は、〔成人層〕の比率を2割以上も上まわっており、調査員にた

表Ⅱ-5 守 秘 義 務

		秘 密 に している	秘密を守っ ていない	そ の 他	D・K	計	
〔高校生〕	町 田	29.3	67.4	3.3	0.0	100.0	331
	福 岡	23.0	74.0	0.8	2.2	100.0	1357
	農 村 部	21.5	77.2	0.1	1.1	100.0	794
	計	23.4	74.1	0.9	1.6	100.0	2482
〔成人層〕 計		39.4	48.1	3.1	9.5	100.0	1435

いする不信感はきわめて強い。これを地点別にみると、「町田」67%, 「福岡」74%, 「農村部」77%となっている。〔農村部高校生〕において、より強い不信感がうかがえる。これは、「調査拒否の理由」にみられた傾向とも符合している。

これらの結果から、統計調査とプライバシーとの関係についての〔高校生〕の統計意識の特徴を、次の2点に要約できる。

- 〔1〕 プライバシー意識のたかまりと統計調査との間の対抗的諸関係は、〔成人層〕よりも〔高校生〕の意識に強くあらわれているということ。
- 〔2〕 その傾向は、〔高校生〕内部では、〔都市部高校生〕よりも〔農村部高校生〕において顕著であるということ。

「成人調査」の結果によれば、統計調査におけるプライバシー侵害感や悪用への危惧感は、〔農村部成人層〕より〔都市部成人層〕に強くあらわれていた（前出図Ⅰ参照）。このことを考えるならば、〔高校生〕の統計意識の第2の特徴は、〔成人層〕に析出した地域差とは方向を異にする都市部と農村部との「逆転現象」である。

ここで、「正しい統計と個人の秘密」との関係について、「高校生調査」の結果をみておこう（表Ⅱ-6参照）。「正しい統計」より「個人の秘密」を優先するという回答に注目すると

表Ⅱ-6 正しい統計とプライバシー

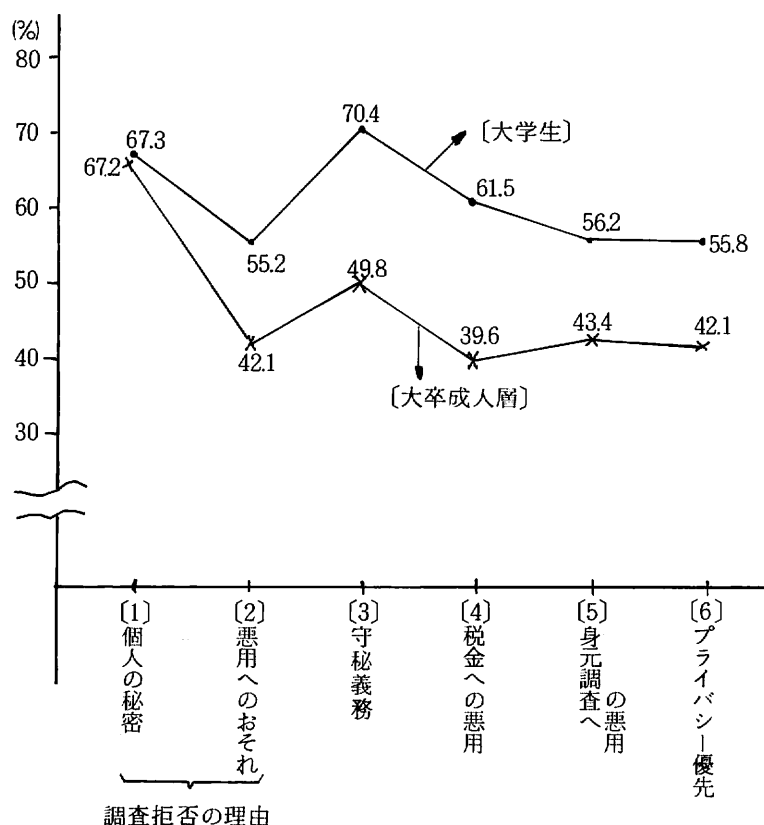
		統 計 優 先	プ ラ イ バ シ ー 優 先	そ の 他	D・K	計	
〔高校生〕	町 田	36.0	58.3	5.7	0.0	100.0	331
	福 岡	32.7	59.0	6.5	1.8	100.0	1357
	農 村 部	30.1	66.8	2.4	0.8	100.0	794
	計	32.3	61.4	5.1	1.2	100.0	2482
〔成人層〕 計		42.6	46.5	2.6	8.3	100.0	1435

〔高校生〕が〔成人層〕の比率を、全地点計で15%ほど上まわっている。また、地点別には、〔農村部高校生〕と〔都市部高校生〕との間に1割近くの較差がみられる。すなわち、「プライバシー優先」志向は、〔成人層〕より〔高校生〕において顕著であり、さらに〔都市部高校生〕より〔農村部高校生〕にその傾向が強い。われわれは、〔高校生〕の統計意識の特徴〔1〕、〔2〕の集約的表現を、かれらの「プライバシー優先」意識にみいだすことができる。

それはともかく、〔1〕の特徴に関連して、〔大学生〕の統計意識をみておこう。

図Ⅱ－1は、本節の分析でもちいた質問群－調査拒否の理由、守秘義務、調査結果の悪用

図Ⅱ－1 プライバシー関連項目にみる〔大学生〕の統計意識



- 注) 〔1〕 「個人の秘密をしられたくないから」が調査拒否の理由となっている
 〔2〕 「悪用のおそれがあるから」が調査拒否の理由となっている
 〔3〕 調査員や統計職員のなかには秘密を守っていない人がある
 〔4〕 調査で答えたことが、税金の参考資料に利用されている
 〔5〕 調査で答えたことが、身元調査に利用されている
 〔6〕 より正しい統計をつくるためであっても、個人の秘密にふれるべきではない

（税金への利用，身元調査への利用），および正しい統計と個人の秘密との関係についての設問 — にたいして，プライバシー意識のたかまりに起因すると考えられる回答肢を選択したものの比率を，〔大学生〕と〔大卒成人層〕についてグラフ化したものである。したがって，その比率が高いほど，「調査申告とプライバシー」との矛盾が，より強く被調査者の意識に反映されているといえる。

容易にわかるように，その比率は，すべての項目について〔大卒成人層〕より〔大学生〕の方が高い。とりわけ，「守秘義務」にみられる調査員への不信任感，および「税金への悪用」のおそれに関しては，〔大学生〕と〔大卒成人層〕との間に2割以上の開きがみられる。このことから，〔高校生〕の特徴〔1〕を，〔大学生〕一般に共通する傾向として捉えなおすことができる。

さて，「若干の予備的考察」でふれたように，「農村部」の20代若年層の回答は，「正しい統計」より「個人の秘密」を優先するという都市型パターンを示していた（前出表Ⅰ参照）。この「プライバシー優先」志向は，20代若年層において，「都市部」「農村部」ともその比率はかわらない（両地点とも52％）。すなわち，「都市部」と「農村部」という地点差はみられない。

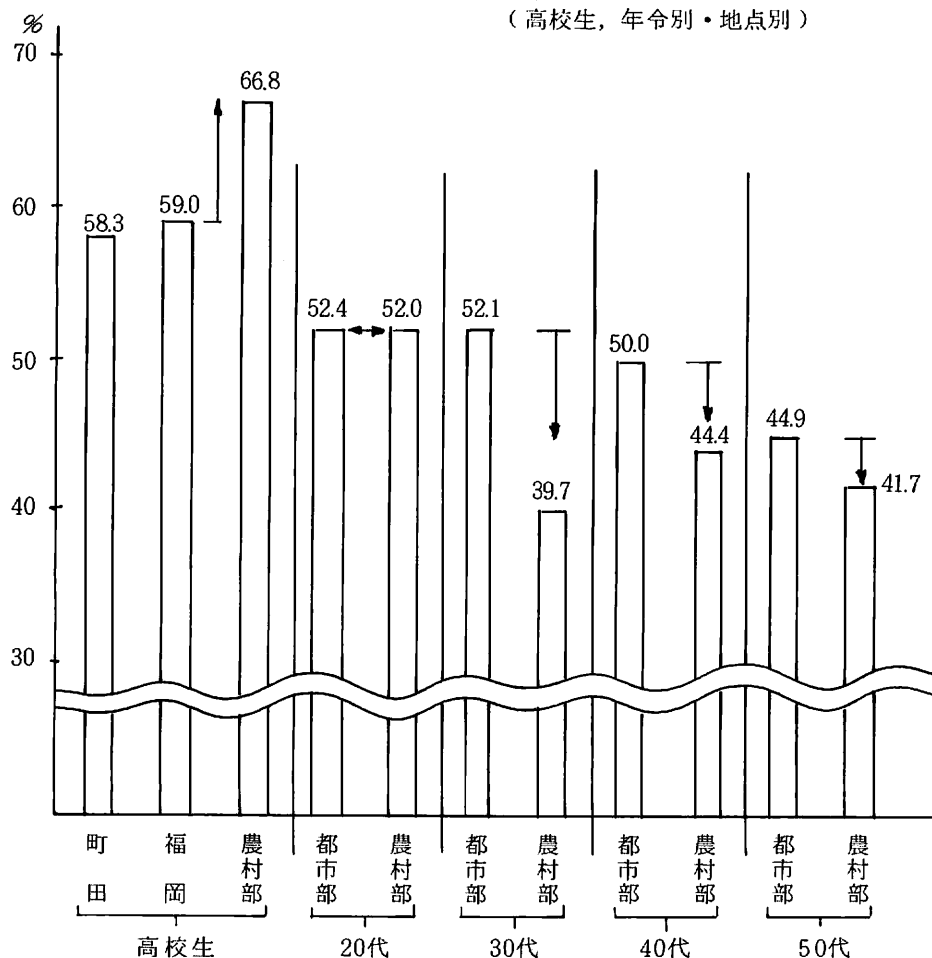
この比率を〔高校生〕についてみると，「町田」58％，「福岡」59％，「矢部」「知覧」「富江」の「農村部」3地点計は67％となっている。〔高校生〕意識の特徴〔2〕で捉えた都市部と農村部との「逆転現象」があらわれている。

われわれは，〔高校生〕および20代若年層の成人にみられるこれらの特徴を，プライバシー優先意識の「地点間均等化傾向」として捉えることができるのではないだろうか（図Ⅱ－2参照）。

なるほど〔高校生〕にみられる都市部と農村部とのこの「逆転現象」は，データ上は〔高校生〕の統計意識の地域差をあらわしているように見える。しかしそれは，〔成人層〕における地域差とは性質が異なる。というのは，この「逆転現象」は，〔成人層〕の回答を規定していた同じ地域的・社会的条件からは，十分には説明できない回答傾向だからである。

このような傾向があらわれた理由の1つとして，次のことが考えられる。すむわち，マスコミや教育効果を通して急速にすすむ高校生意識の「都市型」化と，「農村部」における社会的・風土的・物理的諸条件および地域共同体の人間関係との間の位相のズレである。このズレは，生活のあらゆる場面でこれらの意識と対立することになるであろう。この相克のゆえに，農村部高校生の「プライバシー優先」志向が，一段と強くあらわれたのではないだろうか。とすれば，地点比較にみられる高校生の回答傾向は，都市部と農村部との「逆転現象」を本質とするものではなく，「地点間均等化傾向」こそ，その実体というべきであろう。この点について立ち入った考察は，西村善博「分析Ⅱ — 進路・学歴別分析 —」にゆずる。

図Ⅱ－２ 正しい統計と個人の秘密；プライバシー優先
(高校生、年令別・地点別)



「高校生調査」にあらわれているこれらの「プライバシー優先」志向の強さと、その「地点間均等化傾向」は、統計環境の将来に1つの重要な影響をもたらすように思われる。われわれは、「成人調査」の分析から、プライバシー意識のたかまりを背景とする統計調査環境の悪化現象は、それぞれの地域の生活環境の近代化＝都市化の程度に照応して進行する傾向にあるという結論をすでにえている。「高校生調査」の結果は、都市型統計意識を一様に担っていく新世代によって、この傾向にさらに拍車がかかけられつつあることを暗示している。

Ⅲ 統計不要論と統計教育

「個人の秘密をしられたくないから」および「悪用されるおそれがあるから」という要因とならんで、統計調査をことわる理由として強く意識されていたもう1つの要因は、「めんどろ

くさいから」という被調査者の意識である。表Ⅲ－１は、この要因についての集計結果を掲げたものである。

表Ⅲ－１ 拒否理由；めんどくさいから

		大きな理由 となっている	少しは理由 になっている	あまり理由 になっていない	全然理由 になっていない	その他	D・K	計	
〔高校生〕	町田	37.2	25.7	10.6	26.0	0.6	0.0	100.0	331
	福岡	34.9	24.8	11.4	28.5	0.1	0.1	100.0	1357
	農村部	24.8	23.2	14.4	37.7	0.0	0.0	100.0	794
	計	32.0	24.4	12.2	31.1	0.2	0.1	100.0	2482
〔成人層〕計		28.2	31.7	14.1	18.3	0.6	7.1	100.0	1435

われわれは、この表から、前節の「プライバシー優先」志向にみたものとは異なる特徴をよみとることができる。その一つは、〔成人層〕と同様の地域差が〔高校生〕にもあらわれていることである（前出図Ⅰ参照）。すなわち、「めんどくさいから」を調査拒否の理由として強く意識しているものの比率は、「農村部」より「都市部」の方が高い。「理由となっている」という回答は、「都市部」の「町田」と「福岡」では、6割前後であるのに対し、「農村部」では5割にもみえない。

しかしながら、この表ではもう一つの特徴に着目したい。〔高校生〕と〔成人層〕を比較すると、調査拒否の「理由となっている」という回答は、〔高校生〕計56％、〔成人層〕計60％と、〔高校生〕の方が低い。「（調査が）めんどくさいから」という拒否要因は、まだ〔成人層〕ほどには強く〔高校生〕の意識にのぼっていない。

これと同じような回答傾向が、「政治にたいする統計の影響力」に関する〔高校生〕の評価にもあらわれている（表Ⅲ－２，３参照）。「総理大臣支持率の動向は、総理の態度に影響を

表Ⅲ－２ 世論調査と総理大臣の態度（〔高校生〕，〔成人層〕計）

	影響を与えている	影響を与えていない	その他，D・K	計	
〔高校生〕計	82.3	15.9	1.9	100.0	2482
〔成人層〕計	61.6	27.3	11.0	100.0	1435

与えていない」あるいは「統計に反映された物価の動向は政治に影響を与えていない」という回答比率は、〔成人層〕のそれより低く、〔高校生〕の評価はかならずしも否定的ではない。

しかし、これらの結果から、すぐさま将来の統計環境を楽観視することは早計であろう。というのは、回答者である〔高校生〕は、国の統計調査にたいしてまだ申告経験をもたず、ま

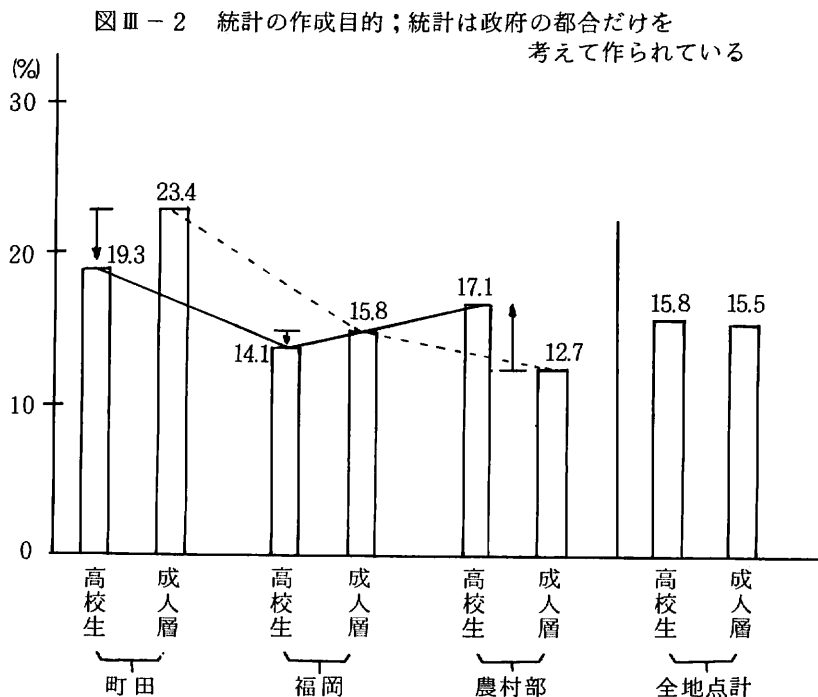
表Ⅲ－３ 物価の動向と政治（〔高校生〕，〔成人層〕計）

	影響を与えている	影響を与えていない	その他，D・K	計	
〔高校生〕計	77.0	21.9	1.1	100.0	2482
〔成人層〕計	68.1	23.3	8.7	100.0	1435

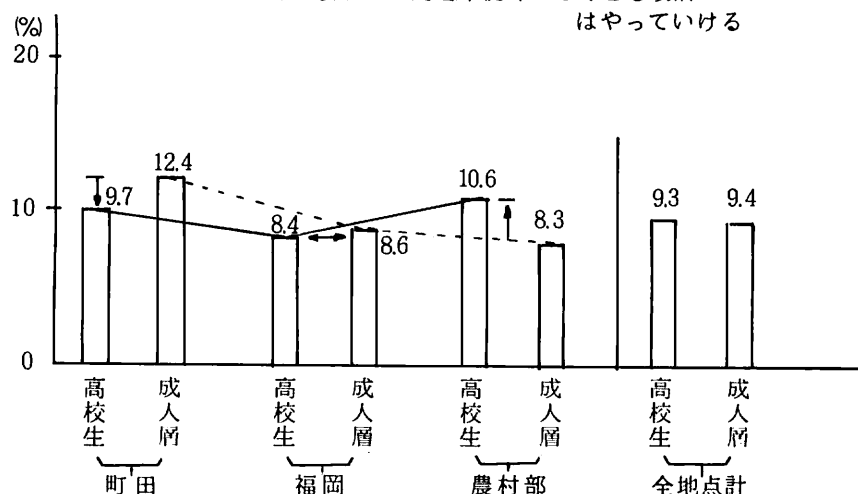
た，経済的に自立した社会人としての生活経験もないからである。したがって，これらの回答傾向もそのようなものとして理解されねばならない。しかしなによりも，統計環境悪化の徴候は，別の側面から〔高校生〕の意識にもあらわれている。

われわれは，社会や政治における統計の役割，換言すれば統計の社会的意義についての被調査者の理解や評価をするために，いくつかの質問を用意した。先にみた「政治にたいする統計の影響力」についての質問もその一つであるが，もっと直截に被調査者の意見をひきだした質問がある。それは，「政府の統計作成目的」および「統計と政治との関連」についての理解にかかわっている。

図Ⅲ－２，３は，そこでえられた「政府が統計をつくるのは，政府の都合だけを考えてのことである（国民の生活向上のことは考えていない）」という意見と，「（国の政治には統計は必要ではなく）統計がなくても政治はやっていける」という意見を，それぞれグラフ化したものである。



図Ⅲ－3 統計と政治との関連；統計がなくとも政治
はやっていける



「統計は政府の都合だけでつくられている」あるいは「統計は政治に必要な」という意見は、「統計不要」論と密接に関係しており、したがって、これらの意見にあらわれた被調査者の統計意識を「統計不要」論的意識とよぶこともできよう。

それをみると、〔成人層〕では、「都市部」の方が「農村部」よりその比率が高く、「農村部」→「福岡」→「町田」の方向に上昇傾向にある。

これにたいして〔高校生〕では、「統計は政治に必要な」という回答比率は、「町田」10%、「福岡」8%、「農村部」10%、「統計は政府の都合だけで作られている」という意見では、「町田」19%、「福岡」14%、「農村部」17%となっている。「都市部」と「農村部」の地域差はほとんどない。

前節のプライバシー問題で扱った「地点間均等化傾向」が、「統計不要」論的意識においてもみられる。とくに「農村部」において、〔高校生〕が〔成人層〕より「統計不要」論的意見が高くなっていることは、銘記されねばならない。

この特徴にくわえて、さらにつぎの点を指摘しておきたい。それは、「統計不要」論的意見が、〔高校生〕でも〔成人層〕と同じくらい広く浸透しているということである。「統計は政治に必要な」という回答は、両者とも9%、「政府の都合だけで作られている」は、両者16%と、全く層差はみられない（数値は全地点計）。このことは、〔大学生〕と〔大卒成人層〕との数値にも同様にあてはまる（表Ⅲ－4、5参照）。

ところで、われわれの考察の対象である〔高校生〕および〔大学生〕を、〔成人層〕と区別する大きな特徴は、かれらの主要な生活時間が、学校教育の場でついやされているという点である。とすれば、そこにおいてなんらかの形で統計教育というものが行なわれているかぎり、それが〔学生層〕の統計意識の形成におよぼす影響は大きなものがあるであろう。したがって、また現行統計教育の背景にある価値観念は、そのままに〔学生層〕の統計意識に反映されざる

表Ⅲ－４ 統計の作成目的（〔大学生〕，〔成人層大学卒〕）

	政 府 の 都 合 だ け	国民の生活 向上のため	そ の 他	D・K	計	
〔大 学 生〕	15.9	80.4	2.4	1.4	100.0	1020
〔成人層大学卒〕	12.3	83.4	2.1	2.1	100.0	235

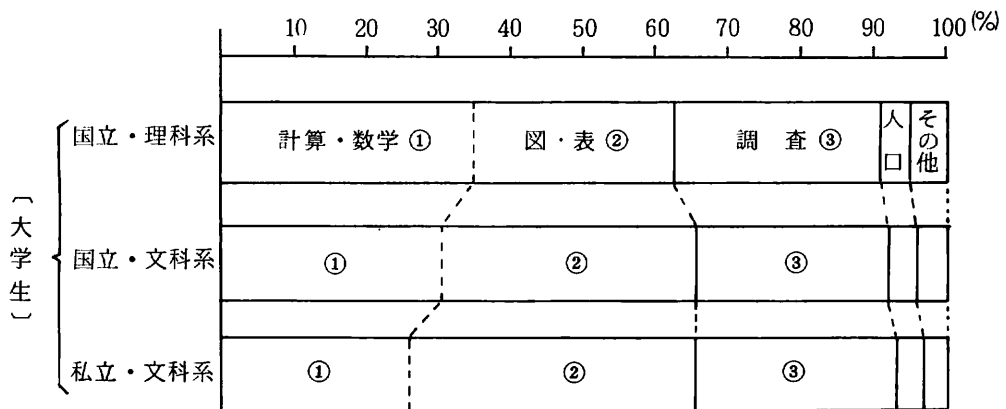
表Ⅲ－５ 統計と政治との関連（〔大学生〕，〔成人層大学卒〕）

	統計は政治 に 必 要	なくてもよい	そ の 他	D・K	計	
〔大 学 生〕	84.7	5.7	6.4	3.2	100.0	1020
〔成人層大学卒〕	83.8	6.0	5.1	5.1	100.0	235

をえない。次図（図Ⅲ－４）をみると、そこにひとつの統計教育の成果がうかがえる。

この図は、「統計」という言葉から〔大学生〕が連想したイメージを、大学類型別に示している。まず、「計算・数学」と「図・表」を連想する「計数思考」型の比率が高いことを、〔大学生〕の一般的特徴として指摘できる（〔大学生〕計64％）。しかし、ここでは、「理料系コース」の大学生と「文科系コース」の大学生の回答パターンの類似性に注目したい。

図Ⅲ－４ 「統計」についてのイメージ



「計算・数学」と「図・表」という項目を、「計数思考」型回答として一つのカテゴリーと考えると、「理料系コース」も「文科系コース」も全く同じパターンをとっていることがわかる。いずれのコースも、「計数思考」型回答が6割強、「調査」が約3割、他の項目は1割にもみえない。

両コースの相違は、「計数思考」型回答の内部に、みられるだけである。すなわち、「理料系コース」では「計算・数学」の比率が高く、「文科系コース」では逆に「図・表」を連想するものの比率が高い。理料系と文科系では、大学および社会においても、かれらの統計へのか

かわり方は異なるであろうが、統計にたいして抱くイメージは「計算・数学」か「図・表」かという程度のちがいでしかない。

このことを、先にみた〔学生層〕における「統計不要」論的意識とも考えあわせるならば、統計数理の理解あるいは解析手法の習得に重きをおくわが国の統計教育のあり方に、大きな問題が存在しているように思われる。

結びにかえて

以上、われわれは、「学生調査」の結果を中心として〔学生層〕の統計意識を検討してきた。本稿で析出した〔高校生〕および〔大学生〕の統計意識の特徴を整理しておこう。

まず第1点は、「成人調査」にみられた「都市部」と「農村部」との間の統計意識の相違――それは「都市部」において「農村部」より統計環境が悪化していることを反映していた――は、「高校生調査」ではほとんどみられず、それにかわって統計意識の「地点間均等化傾向」が顕著であること。この特徴は、「高校生調査」のプライバシーに関連する質問項目においては、「農村部」の方が「都市部」より統計環境が悪化しているかのような「逆転現象」さえも示していた。

第2点は、プライバシー意識のたかまりを背景とする統計調査環境の悪化は、「都市部」「農村部」両地点とも、〔成人層〕よりも〔高校生〕の意識において強くあらわれていること。このことは、〔大学生〕と〔大卒成人層〕との比較においても同じようにみられた。

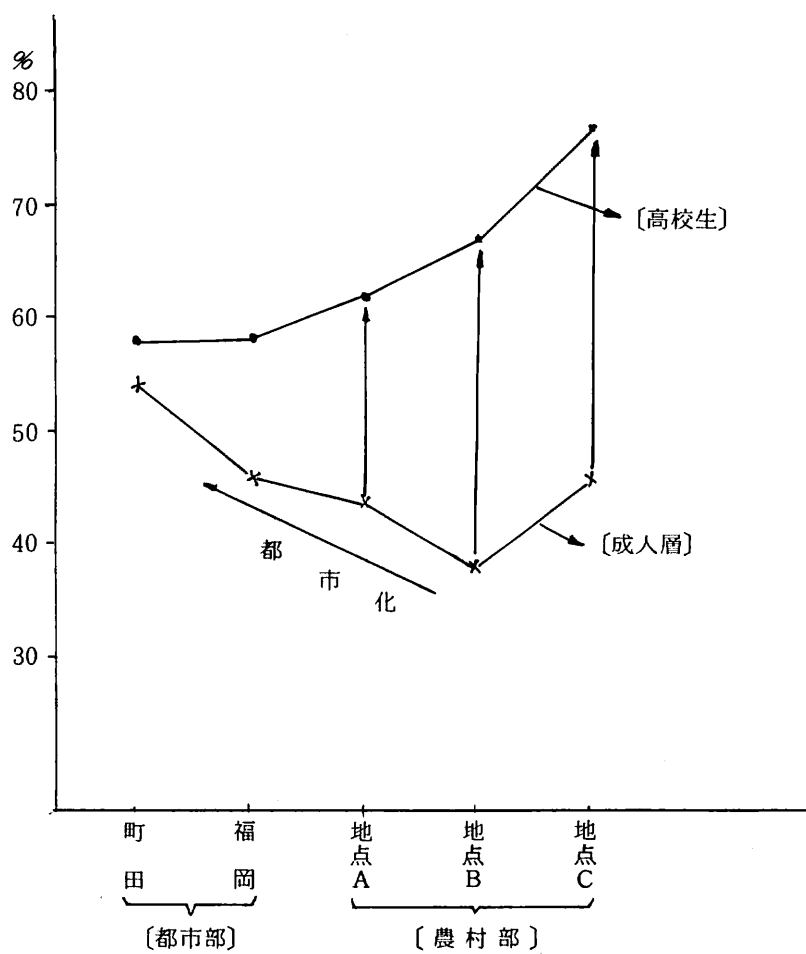
第3点は、〔学生層〕の「統計不要」論的傾向が〔成人層〕のそれとほとんどかわらないということ。これが第1点で指摘した統計意識の「地点間均等化傾向」と相まって、「農村部」では、〔高校生〕が〔成人層〕よりも「統計不要」論的意見が強いという結果をもたらしていた。

グラフ（図Ⅳ）は、「正しい統計をつくるためであっても、個人の身上や生活内容にはふれるべきではない」という「プライバシー優先」志向について、〔成人層〕と〔高校生〕の地点別傾向を示している。

このグラフには、統計環境の悪化現象をひきおこす2つの要因が如実にあらわれている。1つの要因は都市化である。それは、〔成人層〕の比率が都市部（町田）の方向に上昇傾向をみせていることから読みとることができる。他の1つの要因は、新旧世代の意識変化、換言すれば新世代における都市型意識である。〔高校生〕の比率が〔成人層〕の上方に位置することに、このことが示されている。

この2つの要因が、「農村部」における〔高校生〕と〔成人層〕との間に、統計意識の大きなズレをもたらしていることは注目されねばならない。それは、2割から3割もの隔差となっ

図Ⅳ 正しい統計と個人の秘密；
プライバシー優先



てグラフにあらわれている。この隔差は、現代の統計環境が直面している矛盾の大きさを象徴してはいないだろうか。